



はてさて二人の恋の道行  
湯気のむこうに見え隠れ  
げに恐ろしき苦界の身の上  
三分ちぎは五里霧中です

小腹が空いたら三分間の恋

彼女と俺は、カップ麺を食べた。  
「今の話って重要？」  
彼女はスープに沈んだ具を箸で探っている。  
「……たぶん」  
「わかった」  
隣へ寄り添い、俺に笑顔を見せた。  
「説明するけど、その前に、おいしかったかどうか教えてくれる？」  
彼女の顔が近付いてくる。カップ麺が伸びることは、おそらくもつないのだから。

俺が、三分ちよほどのカップ麺にありつく日はやってくるのだろうか。  
がむしやらに友人は、カップ麺を食べ始めた。容器の中で俺のカップ麺が伸びる。  
「むこうの浮気で別れた」  
「はあ？」  
「俺の元カノなんだ」  
友人は腕時計を睨んでいた。  
「おまえの彼女」  
キッチンにカップ麺の容器が二つ並んでいる。

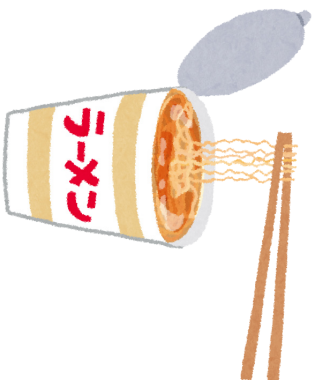
小腹が空いたら三分間の恋

カップ麺が伸びる条件は以下の通りである。  
キッチンに立ち、彼女は紅茶を淹れていた。  
購入したケーキはひとつ。俺は甘いものが苦手である。  
しかし、小腹は空いていた。  
ケトルの湯を相伴し、カップ麺の容器に湯を注ぐ。  
「そういうの食べると舌がバカになるよ」  
他愛無いおしゃべり。

小腹が空いたら三分間の恋

## 三分間の恋

小腹が空いたら



題名 小腹が空いたら三分間の恋

作者 ドーナツ

発行日 2015年2月28日

連絡先 twitter: @donut\_no\_ana

tumblr: http://donut-st.tumblr.com/

イラスト: http://www.irasutoya.com/

※自作の twmovel を改稿、再構成しています。

恋は甘い 甘い 甘い 甘い 甘い 甘い 甘い 甘い 甘い 甘い  
食べてみなければいけません 夢かまこころか まこころか夢か  
とかく浮世は地獄です



蓋を剥き、容器に湯を注ぐ。平らに戻し、蓋の端を折って固定した。携帯端末の数字がカウントダウンを始める。俺はキッチン側の窓から外を見た。  
生垣の向こうを女が歩いている。小さな白い顔を寒風にさらしていった。吐く息と黒いタートルネックの妙。そして、俺のカップ麺が伸びる。